

各地で話題の病害虫

アンズ疫病 (新称)

学名: *Phytophthora cactorum* (Lebert et Cohn)
Schroter

疫病菌によるとみられるアンズの果実腐敗は、長野県の産地においては以前から発生していたが、1995年から長野県果樹試験場が実施した発生調査や病原菌を同定した結果、*Phytophthora cactorum* による病害と判明した (1997)。

本病は成熟期の果実に発病することが多い。枝及び葉での発病はほとんどみられないが、リ病果実に密着した葉は褐色に腐敗する。地表に近い果実で発病が多く、2 m以上の部位での発病は少な



長野県中信農業試験場 飯島章彦氏提供

い。これは、土中の病原菌が降雨により土壌とともに跳ね上がって感染するものと考えられている。

発病初期の果実の症状は、果実表面の一部に健全部との境界が不明瞭な褐色の病斑ができる。症状が進むと病斑は全果面におよび、軟化腐敗し落果する。病斑はスポンジ様の弾力があり、表面には白色の菌糸が薄く生じることがある。

灰星病の症状と混同しやすいが、灰星病は病斑部に弾力がなく、表面には粉状の胞子ができる。

防除対策としては、降雨による土壌中の菌の飛散を防止するため草生栽培や敷きわらを敷くと効果がある。

トラファザミウマ (仮称)

学名: *Hydatothrips* (*Neohydatothrips*)
pseudoannulipes (Johansen)

1993年11月に静岡県でマリーゴールドを加害している本種が発見された。本種は、メキシコ、ハワイ、フロリダ、オーストラリア等に分布し、寄主植物はマリーゴールド以外知られていない。日本では沖縄、埼玉、群馬、栃木、千葉、神奈川、山梨及び愛知各県で発見されている。

本種による加害は、幼虫及び成虫によるもので、葉 (特に新葉)、新芽を食害し、花での食害は見られない。被害は、一見するとハダニの被害状況



静岡県病害虫防除所 池田二三高氏提供

に酷似し、加害が激しい場合には枯死に至る。また、ハダニでの食害ではマリーゴールドが枯死することはあまりない。発生のピークはマリーゴールドの生育の盛んな9~10月である。

マリーゴールドはカタネグサレセンチュウの殺線虫成分を含むため、対抗植物として線虫防除に利用されている。これは環境保全型農業が推進されているなかで注目されつつある。また、近年のガーデニングブームにより、一般家庭や公園等で広く植栽されていることから、今後本虫の被害が問題になる可能性がある。

防除法としては、花卉類に登録のある家庭園芸用マラソン乳剤等の殺虫剤散布が有効である。